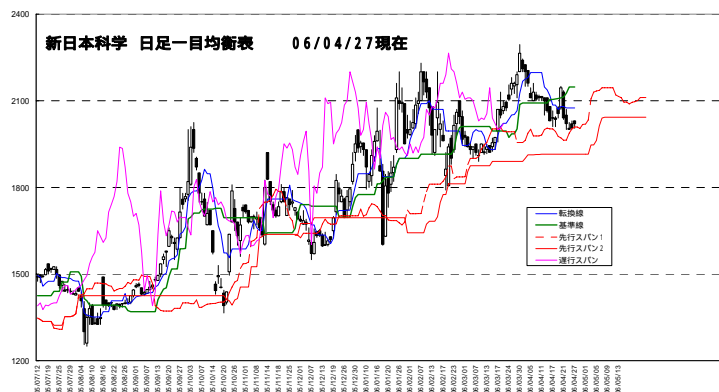


参考銘柄2

新日本科学 (2395 マザーズ)



【臨床試験受託会社】

4/27 株価 2,020 円(100 株)

PER(実) 463.3 倍

PBR(実) 6.59 倍

ROE(実) ----%

発行済株式数 34,344,000 株

配当利回り(実) 0.12%

年初来高低 1600 2295 円

売買高 10 日移動平均 57800 株

ポイント1 前臨床試験に強い CRO(臨床試験受託会社)

1957年に日本初の受託研究機関として鹿児島に誕生。前身の企業が「南日本ドッグセンター(動物病院)」。1960年、前臨床試験の受託業務を開始した。1981年に創業者の長男である医学博士の永田良一氏(現社長)が取締役として入社してから、欧米市場での事業展開や設備投資を積極的に進めた結果、同社は本格的な成長企業の礎を築くこととなった。1999年に臨床CRO事業、2000年にSMO事業を開始し、臨床試験全般においてサービス提供可能な体制を確立。2002年にはバイオベンチャー企業など創薬のサポートに着手し、現在では新薬開発すべての領域で「創薬から臨床まで」という新薬開発に必要な全プロセスをすべて網羅的に受託できる体制を確立している。また研究開発拠点は日本だけでなく、米国のシアトル、中国の広州にも設置しており海外での事業展開に注力した。また資金調達の手段として2004年3月にマザーズに株式を公開。前臨床試験の分野に関しては日本NO.1の地位を確保しており、取引先はロシュ、アムジェン、武田薬品など国内外の大手製薬メーカーが名を連ねる。サルなどの大型実験動物を使った前臨床試験の受託研究を主力としており、新薬開発のアウトソーシングを急ぐ製薬メーカーからの受注によって業績を伸ばしている。また創薬支援ビジネスにも進出を図る。製薬メーカーの間では国境を越えた経営統合、提携が加速しており、合理化によって得られた経済効果を新薬の研究開発に重点的に振り向けている。ここに新薬開発段階でのアウトソーシングの流れが重なって、医薬品の開発受託分野は今後も大きく拡大すると見られている。

ポイント2 高い成長分野～ひしめく競合

同業にはその高い成長期待もあって、国内だけで80社近くがひしめいており、単価引き下げの要請も厳しい。そこで同社は事業領域の拡大に取り組み、欧米企業との提携や国内での買収などを通じてゲノムやプロテオミクス(たんぱく質の機能解析)分野に進出。創薬支援型CRO(臨床試験受託会社)としてオンリーワンの存在を目指している。直近5年間は1

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

新日本科学 (2395 マザーズ)

件当たりの受託収入を 100 万～200 万ドル規模の大型臨床試験の獲得に重点を置いている。その結果、売上規模は 2001 年 3 月期に 41 億円(単体)だったものが、75 億円 95 億円 123 億円と急拡大を遂げている。企業規模の急激な膨張によって 1998 年以降の 6 年間でグループ全体の従業員数は 4 倍以上に拡大、現在の従業員数は 1800 人を超える規模になっている。国内での事業環境が厳しいため、2005 年 1 月末には米国での事業を拡大すると発表。テキサス州に前臨床用のサルスの繁殖や飼育、検疫のための拠点を新設した。というのも欧米ではメルク社の消炎鎮痛剤の副作用問題から、医薬品の安全性への関心が高まっていた時期と重なっている。足元、欧米では人間に近いサルによる試験への需要が大きくなっている。米国の前臨床市場は、日本の 5 倍以上の規模となっているが、同社に対しても動物実験の依頼が増加して対応が追いつかない状況となっている。今後 5～6 年で 10 億円を投じて研究能力を拡充する予定。将来的には米国での売上高を現在の 3 倍の 100 億円にすることを目指している。新たな成長機会として株式市場でも大いに注目されている。

ポイント 3 CRO の強みと SMO への進出

新薬の開発プロセスは、大きく分けて次の 5 段階のステップを辿る。

基礎研究(2～3年)

前臨床試験(3～5年)

臨床試験(3～7年)

承認審査(2～3年)

製造販売後調査

同社が得意とするのはこの中の前臨床試験段階であるが、90 年代以降の拡張期に事業分野を次々と広げてゆき、現在は ～ のすべての臨床試験においてサービスを提供する体制を確立した。2002 年からはバイオベンチャーでの創薬サポート業務にも着手しており、ビジネス領域は一段と拡充されている。一般的に新薬開発に必要な試験段階を大きく 2 つに分けると、「前臨床試験」と「臨床試験」に分かれる。このうち臨床試験は、製薬メーカーから委託を受けた医療機関の医師によって、医薬品としての候補となる物質(被験薬)がヒトに対してどの程度安全か(安全性)、どの程度有効か(有効性)を検討・確認するプロセスになる。これに対して同社が得意とする前臨床試験とは、上記のステップの にあたり、研究開発段階にある新薬の基礎研究において、新薬候補となる化合物を探し、スクリーニングを経た新しい化合物に対してその安全性や有効性を確認するための試験を指す。医薬品として新薬の許可申請には必須のものである。これら一連の臨床試験をすべて 1 社で手がける CRO は数少ないが、同社は医薬品開発のいかなるプロセスでも製薬メーカーから一貫して業務を受託できる国内唯一の企業グループを作り上げている。常に CRO の最先端を行くと自負している同社は、2000 年からは SMO 事業にも進出している。SMO とは、医療機関が製薬メーカーから委託を受けて臨床試験を実施するにあたり、医療機関が行う業務の一部を受託または代行する「治験施設支援機関」という位置付けだが、新薬開発が複雑化、長期化、大規模化する近年の傾向にあって、臨床試験を実施する手順はますます煩雑化する状況にある。これに伴って実際に治験データを収集する医療機関の現場も煩雑化の一途をたどっている。医療機関に代わって業務を受託する SMO の役割はますます重要視されており、SMO 市場の急拡大とともに新規参入も相次いでいる。同社は「新日本科学臨床薬理研究所」において、業界に先駆けて 2000 年から臨床試験コーディネーター(CRC)の教育を開始しており、米国における CRC 教育プログラムをいち早く導入して、わが国における SMO 業務の準備体制を整えた。2001 年からは本格的に SMO 事業を開始している。

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。

新日本科学 (2395 マザーズ)

ポイント4 淡々と上昇トレンドが続く

同銘柄は、2004年11月12日に657円の安値をつけた後、規模の拡大に伴い、着実な上昇トレンドを続けている。浅い調整で13週移動平均線、深い調整で26週移動平均線という、最も理想的な上昇トレンドにあり、現在株価はちょうどこの13週線(2050円)前後で推移しており、短期的な調整は終了したと推測される。26週線は1910円にあり、目先の買いの場合、ここまでがロスカットの限界線であろうか。短期の期待リターンは3月30日の2295円であるから10%前後でしかないが、マザーズに公開時の最高値2940円回復の道のりを考えると、ロングで保有したい銘柄と言えよう。

業績(百万円・前期比%)

	売上高		経常利益		純利益		EPS(円)
2005/3(実)	12295	-0.6	-454	-	-472	-	-30.0
2006/3(予)	14100	14.7	430	-	150	-	4.4
2007/3(予)	16000	13.5	900	109.3	450	200.0	13.1

(四季報より)

この資料はファーストメイク・リミテッドが会員のみ発行するものです。当資料に記載されている数字・意見等は、当社がその正確性を保証するものではありません。また、投資に関する最終判断はご自身で行われますよう、お願い申し上げます。加えて、当資料の著作権はファーストメイク・リミテッドに帰属し、いかなる方法によっても、全部もしくは一部を無断で複製・転用・配布・転送することを禁じます。